

アドリア海東岸諸国探訪

コロナ騒ぎで約3年間海外旅行に出かける機会がなかったけれど、令和5年11月、やっとコロナ騒ぎが落ち着き、私の中の「旅の虫」が騒ぎ始めました。

何処にしようかなと思いを巡らせ、アドリア海東岸諸国(バルカン半島北西部)を探訪することにしました。

この地域は北海道とほぼ同緯度にあり、時期も11月中旬なのでもう寒いかなと心配半分で6泊8日の旅を決行しました。

ターキッシュエアラインズを使ってトルコのイスタンブール経由でボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、クロアチア、スロベニアの旅をします。

第1日 成田からイスタンブール経由でサラエボへ

成田から約14時間、ボーイング787-9でトルコのイスタンブール空港に向います。

ウクライナでの戦争の影響かなのか、ロシアの南側をくねくね曲がりながらトルコに向いました。

イスタンブール空港で約1時間の乗り継ぎの後、エアバス300-20で約2時間。かなり古そうな機体でしたが何とか無事にボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボのブトミル・サラエボ国際空港に到着しました。

現地時間は19時30分で、日本との時差は8時間です。



翌朝ホテルの16階の展望食堂で朝食を摂りましたが大変美味しく、旅の行先が楽しくなってきました。

サラエボの町はぐるっとディナルアルプスに囲まれた盆地になっており、白雲がたなびく気持ち良い朝を迎えました。

第2日 「サラエボからモスタル・ドブロブニクへ

先ずボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボの町を観光しました。

ボスニア・ヘルツェゴビナは、東南ヨーロッパのバルカン半島北西部に位置し、ボシュニャク人(イスラム系)とクロアチア人が主体のボスニア・ヘルツェゴビナ連邦と、セルビア人中心のスルプスカ共和国の二つの構成体からなる連邦国家です。



広さは5.1万km²、人口は約323万人でボスニア語、セルビア語、クロアチア語が使用され、宗教はイスラム教、セルビア正教、カトリックが信仰されています。

6世紀にはスラブ人が定住を開始し、14世紀にはボスニア王国を確立、15世紀に入るとオスマン・トルコによるボスニア征服、19世紀にはオーストリア・ハンガリー帝国の統治下となり、20世紀にはセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国領となり、1945年旧ユーゴを構成する共和国の一つとして発足するという複雑な歴史をたどります。

ユーゴスラビアから独立したボスニア・ヘルツェゴビナでは1992年から1995年まで民族(宗教)間の紛争が続き、歴史・文化遺産が破壊されました。

民族間の不信感が今も根深く残っているけれど、各民族共通の目標であるEU加盟に向けて、国内の諸改革に取り組んでいるようです。

サラエボの町を観光

1914年にオーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者であるオーストリア大公フランツ・フェルディナントと妻のゾフィー・ホテクが、サラエボを訪問中、ボスニア系セルビア人の青年ガヴリロ・プリンツィプによって暗殺されました。

この事件が第一次世界大戦の発端となりましたが、現場のラティンスキー橋とすぐ傍の博物館とパレードが開始されたサラエボ市役所を見てきました。

サラエボの町では古くからのキャラバンサライが維持されていました。また、カトリックの大聖堂の前では敬虔そうな人達が説明に耳を傾けていました。



オスマントルコ帝国に支配された時代も長く続き、モスクやトルコ風の広場が建てられ、トルコ風の土産店も立ち並んでいました。



古都モスタルへ

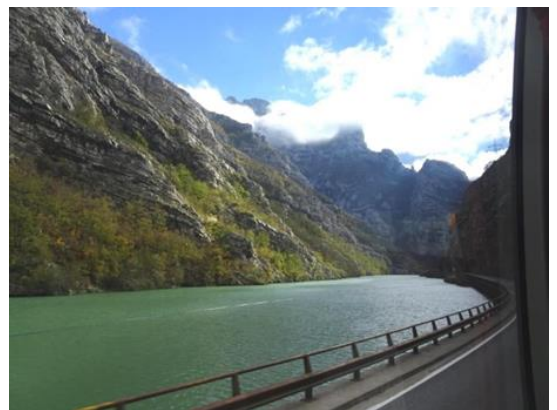
サラエボの南西約70kmにある古都モスタルへ約3時間かけて移動します。

ボスニア・ヘルツェゴビナ第2のネレトバ川沿いに進みます。途中、ユーゴスラビアからの独立に伴う内戦で橋が破壊されてそのままの姿になっていました。

更に進んで行くと豊かなブドウ畑が開けてきました。この国のワインは美味しい評判ですが、産出量が少ないので輸出はされていないようです。

モスタル市街に到着。カトリックの教会が建てられています。内戦の銃弾跡も保存されていました。

モスタル市街にあるオスマン朝時代のスタリ・モスト(古い橋)は、内戦時に砲弾によって崩れ落ちてしまいましたが、現在は創建当時の姿に再建されて2005年には、ボスニア・ヘルツェゴビナ初のユネスコ世界遺産に登録されました。あの悲惨な歴史を忘れるなという碑が残っています。





スタリ・モスト(古い橋)の両側に独立を求めるクロアチア人とそれを阻止しようとするセルビア人が対峙していたそうです。

風光明媚なモスタルは、ドブロブニクからの一日観光が可能で、観光シーズンは浅草寺仲見世やディズニーランドのような混雑状態になるそうです。オスマントルコに征服された時代が長く、橋のたもとの店ではトルコ風の土産が売られていました。

クロアチアのドブロクニクへ

約2時間バス移動をしてボスニア・ヘルツェゴビナから国境を越えて、クロアチアのドブロクニクへ移動しました。



第3日 クロアチアのドブロブニクからモンテネグロのコトルへ

クロアチアは1,000を超える島々を抱え、広さは5.6万km²(九州の約1.5倍)、人口390万人で、首都はザグレブ、公用語はクロアチア語です。

クロアチア人(イタリア系)が91%を占め、宗教はカトリック、セルビア正教等です。

クロアチアではサッカー人気が高く、2018年のワールドカップでは準優勝、2022年のワールドカップでは日本にPK戦に勝ち3位になっています。総合格闘技のミルコ・クロコップもクロアチア人です。



ドブロブニク市内を観光

ドブロブニクは「アドリア海の真珠」とも呼ばれ、町の起源は古くローマ帝国時代、あるいはそれ以前に溯るとされており、イタリア語では「ラゲーザ」とよばれていました。

貿易で栄えた都市で16世紀に完成した巨大な石の壁に囲まれた独特な旧市街で知られています。

イタリアのベネチアからやって来たクロアチア人は、この地の小島に町を作りました。山側と小島の間には海峡があり、以前から山側に住んでいたスラブ人から水の補給を受けていました。

その後、海峡は埋め立てられて中央通りになり、その両側に町が発展し、一時「ドブロブニク共和国」として独立をしていました。



ピレ門から旧市街へ入って観光しましたが、この季節は天候が変化しやすく、青空が見えたり、小雨がパラついたりしていました。オノフリオの大噴水、中央通り、フランシスコ会教会や大聖堂を見て歩きました。

旧総督邸を観光しましたが、今は市役所や博物館になっており、裏側にまわると港に出ました。

総督邸でこの港に着いた貿易船の手続きを行っていたそうです。

なお、現在のクルーズ船などの大型船はこの港では狭すぎるので、新港を使用しているそうです。



町を取り囲む城壁は2000mほどあり、そのうちの3分の1ほどを歩きましたが、上下があり結構きつかったです。曇り空から時折光がさす中、城壁からの旧市街の赤屋根の見晴らしはジブリの世界を感じました。



モンテネグロのコトルへ

午後、クロアチアのドブロブニクから2時間半ほど移動をして、モンテネグロのコトルを観光しました。

モンテネグロは岩の多い山々や中世の村々、アドリア海に沿った細長いビーチで知られています。面積は1.4万 km²、人口60万という小国で、宗教はセルビア正教、イスラム教、カソリックです。モンテネグロ人が45%、セルビア人が29%です。モンテネグロ人と言ってもセルビア系で、公用語はモンテネグロ語です。

6～7世紀にスラブ人がバルカン半島に定住した後、14世紀にセルビア王国が樹立されました、その後、セルビア人たちはオスマン・トルコに追い立てられ、この地に逃れてきましたが、14世紀末にはオスマン・トルコに支配されました。

その後、ユーゴスラビア王国の一員となりましたが、2006年「モンテネグロ共和国」として独立を宣言し、2007年に国名を「モンテネグロ」に変更しました。



国名のモンテネグロはイタリア語で「黒い山」を意味し、その代表が黒い火山岩の玄武岩でできた聖なる山、ロブチェン山です。フィヨルドのようなコトル湾の沿岸には、コトル、ヘルツェグ ノヴィなどの要塞の町が点在しています。

コトル湾の最奥にある世界遺産のコトルの町は、三方を険しい山々に囲まれた要害の地であり、天然の良港であり、古くから多くの交易船が行き交い城塞港湾都市として栄えてきました。

市街地の上には総延長4.5kmの古代の城壁が築かれています。

一辺300mの三角形のような小さな町の入り口には大砲が据え付けられています。

城門を入ると時計台があり、このエリアが中央広場になっています。

この町は200年に一度地震に見舞われ、要塞も町並みも何度も建て替えられています。



セルビア教会ではこの町の守護神「聖トリュファン」を祭っています。

オスマン・トルコが支配した歴史を感じさせる商店が並んでおり、貴族たちの屋敷や宮殿はホテルや商店に生まれ変わっています。



ライトアップされると山の上まで要塞が築かれているのがよく見えます。

コトルは小さな要塞の町なのに、ドブロブニクから一日観光で行けるので観光シーズン外でも観光客で溢れています。クルーズ船も立ち寄るのでオーバーツーリズム状態で、中国人の観光客を多く見受けました。

2時間半ほどかけて、アドリア海に面する南クロアチアの都市ドブロブニクに戻りレストランでシーフードリゾットの夕食をとりました。エビの他にご飯の中にも貝が沢山入っていました。



第4日 トロギールからスプリットへ

朝食後4時間半ほどバスに乗ってドブロブニクからトロギールへ移動します。

ドブロブニクもトロギールもクロアチアの町ですが、従来はボスニアヘルツェゴビナを経由して行く必要がありました。

国境越えの煩わしさ解消のため、海岸沿いの小島にトンネルを通し、橋を架けてボスニア・ヘルツェゴビナを迂回することが出来ました。モスタルで見かけたネレトバ川が海に注ぐ所を通過しました。

海岸道路を離れて中央部の高速道路を走りましたが、石灰岩質のゴロゴロした岩山が続き、豊かな土地柄ではなさそう

です。

トロギールは、クロアチア本土とチオヴォ島の間の小さな島にあり、橋によって結ばれている港町でギリシアの植民地として歴史が始まったそうです。中世の要塞の島として1997年、世界遺産に登録されました。

トロギール大聖堂や、カメルレンゴの砦とヤシの木のプロムナードなど見て回りましたが、この日は何かの記念日というので多くの店は閉まっていました。



スプリットへ

次に、約30分かけてスプリットへ移動しました。

スプリットはクロアチアのダルマチア海岸の町で、ビーチの他に中心部にある要塞のような宮殿で知られています。この宮殿は4世紀に古代ローマのディオクレティアヌス帝が晩年を過ごす為に建てたもので世界遺産になっています。



海側の青銅の門から宮殿の地下に入ると土産物屋さんがありました。昔はゴミ捨て場だったそうです。聖ドムニウス大聖堂(右)と鐘楼が見えます。手前の家は後世に色々な人が勝手に住み着いたらしいです。銅像が立っていましたが、10世紀の司教グルゲールの像で、足の親指を触ると願い事がかなうそうです。



第5日 スプリットからプリトビツェ経由ザグレブへ

早朝6時30分出発で約4時間バス移動をしてクロアチアのプリトヴィツェへ移動しました。

高速道路で内陸部に移動し、ボスニア・ヘルツェゴビナの国境付近まで来ました。

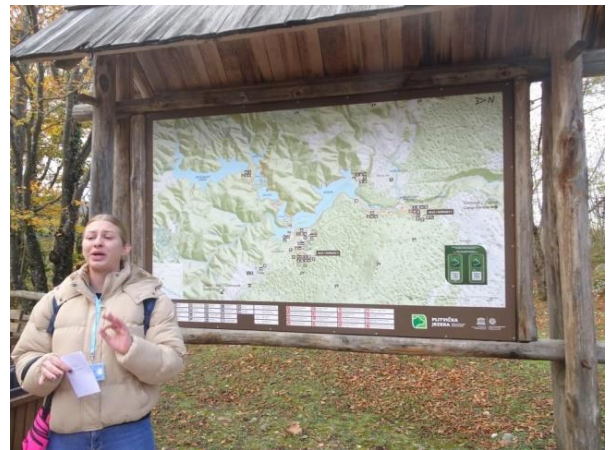
プリトヴィツェ湖群国立公園は、クロアチアの国立公園であり、大小16の湖と92の滝がエメラルドグリーンの幻想的な景観を作り出しており、1979年に世界遺産に登録されましたが、この付近でも内戦が行われたため、一時は危機遺産になってしまったそうです。

ボートや徒歩で広大な公園内を移動しましたが、気温5度でやや寒さが身に沁みました。

山からの水がカルスト地形の石灰石の間を通過する度に浄化され、きれいな緑色になったそうです。

プリトヴィツェ川の大滝は落差87mで、この川は下ってドナウ川に合流するそうです。清流の中を魚が泳いでいました。現地ガイドのさんが「チャンプ」とか言っていました。

清流の淵をかなり歩いてコジャック湖に到達し、そこから湖を30分ほどかけて船で渡りました。



ザグレブへし

その後、2時間半ほどバスで移動しザグレブに到着し、市内観光をしました。

ザグレブには18世紀から19世紀にかけて栄えたオーストリア・ハンガリー帝国時代の建築が多いそうです。

オリエント急行に出てくる「鉄道駅」からトラムに乗って2駅、イエラチッチ広場に着きました。

イエラチッチ広場にある騎馬像がイエラチッチ将軍でクロアチアの独立の英雄だそうです。

2018年のサッカーワールドカップで準優勝した時には、この広場に8000人の人々が集まりお祝いをしたそうです。

大聖堂は2つの尖塔が美しく、その高さは国内一を誇り、市内どこからでも良く見えるときいていましたが、2020年に起こったザグレブ大地震によって修復の最中でした。



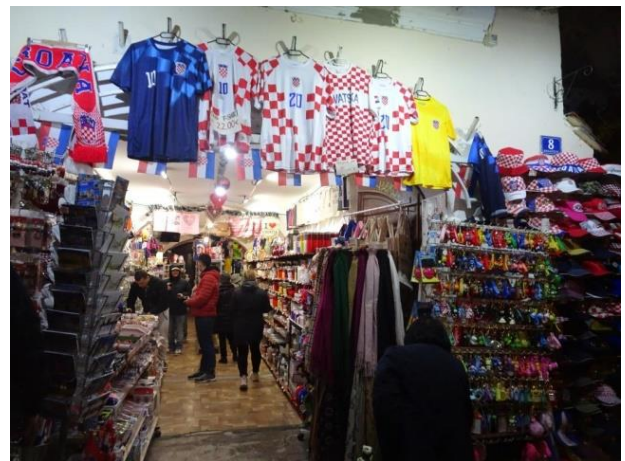
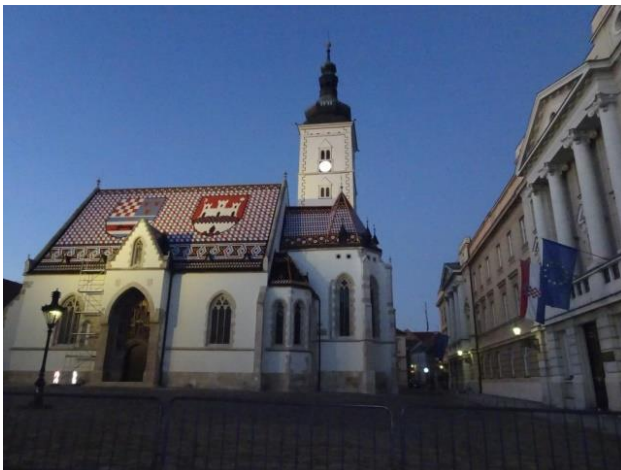
店屋街を歩きましたが、その中に、ネクタイ発祥の店というのがありました。

石の門は1731年に起こったザグレブ大火災の際に無傷で残った唯一の門で、ゲート自体がチャペルになっています。

聖マルコ教会はカラータイルの紋章がある屋根が特徴です。すぐ隣には国会議事堂や首相官邸もあり、この辺りが政治の中心になっています。

4時過ぎですがザグレブの町に日暮れが近づきました。散策を終えてイエラチッチ広場に戻ります。

土産物屋さんの人気商品は勿論サッカーのユニホームです。



第6日 スロベニアのブレッド・リュブリャナへ

ザグレブから約3時間半高速道路を走ってスロベニアのブレッドに移動します。

途中、クロアチアとスロベニアの国境を通過しますが、あっという間に通過できました。

NOMAGO バスがスロベニアの大きなバス会社で、ドライバーのドラゴさんもスロベニア人だからでしょう。



スロベニアは山や湖、スキーリゾートで知られる中央ヨーロッパの国です。スロベニアは、西はイタリア、北はオーストリア、南や南東はクロアチア、北東でハンガリーとそれぞれ国境を接しており、面積は日本の四国とほぼ同じの2. 2万 km²、人口は約200万人で、首都はリュブリャナです。スロベニア人が約90%、クロアチア人が10%を占めており、宗教はカトリックが約60%、公用語はスロベニア語です。

歴史的には、6世紀末にスラブ人が定住を初め、その後、ハプスブルク家の所領となり、1945年にはユーゴ構成共和国の一つとして発足、1991年にスロベニア共和国として独立しています。

ブレッド湖は、「アルプスの瞳」という愛称で人々に親しまれており、ブレッド湖周辺は、かつてセルビアの王族やハプスブルク家の別荘地でもあったスロベニア屈指のレイクリゾートで、そこに浮かぶ緑の島の聖マリア教会の絶景を眺めることができます。



ブレッド島には「プレトナ」と呼ばれる小さなボートで約10分かけて渡ります。船頭はマリアテレジアの時代から世襲制で、ムリノ村出身の男性のみ漕ぎ手となる事が出来るそうで、透明度を保つため、モーターボートの使用は禁止されているそうです。船の名前はお母さんの名前だそうです。

船から下りると、99段の階段があり、その先に希望の鐘で有名な「聖マリア教会」があります。

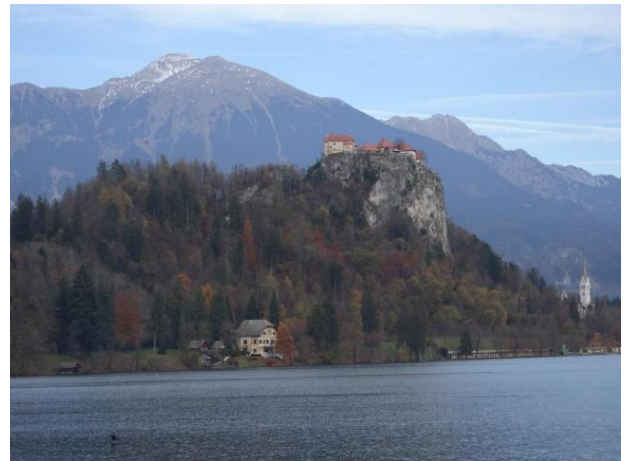
聖マリア教会に残る「望みの鐘」は、恋愛のパワースポットにもなっています。





ブレッド湖のほとり、高さ約100m の断崖にそびえ立つブレッド城は、ロマネスク様式とゴシック様式の外観を持ち、スロベニア最古の城のひとつです。ブレッド城の向こうの山はオーストリアです。

湖のほとりにユーゴスラビア大統領であったチトー大統領の別荘であった建物が高級ホテルになっていました。



スロベニアの首都リュブリャナへ

その後、約30分かけて、スロベニアの首都リュブリャナに移動しました。

首都リュブリャナは数100年の間、オーストリアのハプスブルク家の支配域にあったため、オーストリアの地方都市のような古い街並みがみられます。

中央広場には、スロベニア国歌を作詞した19世紀の詩人ブレシェーレノフ像が立っています。

彼は失恋したのですが、死後、その事を彼女が知り、彼の目の先に彼女の像が飾られています。

三本橋(トロモストヴィエ)はリュブリャナのシンボルの1つです。中央の石のアーチ橋の両側に歩行者専用の橋を付け加えたのが、スロベニア人建築家ヨジェ・プレチュニックだそうです。



町のシンボルであるドラゴンは、力や勇気、大きさの象徴らしですが、色々な場所で見られます。

青空市には美味しそうな果物が並べられていました。



丘の上に建っているのがリュブリャナ城です。最初に造られたのは1144年。現在の姿は16～17世紀になって築かれたものだと言われています。第二次世界大戦中はイタリア人やドイツ人捕虜の収容所として活用されていたそうです。

大勢の人が集まってワーワー行って、ラッパもなって、旗も振られていたので、サッカーのサポーターが氣勢を上げていると思ったのですが、市民が市役所前で抗議行動をしているようでした。

観光後、2時間半かけてクロアチアのザグレブへ移動します。



第7・8日 ザグレブからイスタンブール経由成田へ

朝食後ザグレブ国際空港へ。エアバス321-200でイスタンブールへ。

旅の最後はボーイング787-9に乗って成田に帰りました。

食後、「なにわ男子」の高橋恭平君と、畑芽育さんが主演する「なのに、千輝くんが甘すぎる。」と、もう一本映画を見て、寝て、目が覚めるともう成田の近くまで来ていました。かなり歩き疲れていたようです。

旅の回想

今回はシルバー14人、ヤング2人の16人チームで旅を行いました。

イスタンブールまで約14時間はなかなか厳しく感じました。（帰りは快適でした。）

4か国の観光はかなり厳しいスケジュールで、プリトヴィツェやブレッド湖の歩きもなか大変でした。しかしそれにも勝る感動がありました。

次回の旅行を決行するか否かは私の中の「旅の虫」の機嫌次第というところでしょうか。